

こなとこに



1、富士山のように美しく自然を愛しきれいな環境をつくります

まちの美化を20年



△渡瀬 勝さん

「やっのごみを拾い終わったかなと思うと、すぐ後ろで車の灰皿の吸い殻をぶちまけている人がいたりしてね」と語る今泉6丁目の渡瀬勝さん(75歳)。

渡瀬さんはかれこれ20年前から仕事の合間に、吉原二中の通学路や側溝、近くのお宮さんの掃除を行っています。

ごみのワースト3は、空き缶・菓子などの紙くず・たばこの吸い殻。ゴミ袋を二つ持って掃除しますが、いつもいっぱいになります。でも、翌日には残念ながらもうごみが落ちていたりとか。

渡瀬さんは「道路はやっぱりきれいな方が気持ちがいいし、子供たちに喜んでもらえればうれしいね」と語ります。渡瀬さんの手を煩わすことのない環境を心がけたいですね。

こちら編集室

編集室で今一番の話題は、たばこ。喫煙派と禁煙派の割合が半々になったため、ある日突然、禁煙派の武力制圧が行われました。各自の机の上にあった灰皿が撤去されてしまったのです。どうしても吸いたい人は、臨時の喫煙コーナーへ追いやられました。今のところ禁煙派が優勢ですが、これから喫煙派の反撃も予想されます。さて結末は……。

ふるさとの昔話



杉山 繁次郎さん



今泉の子育て桜地蔵さん

吉原二中の前を西に数分歩くと、子育て桜地蔵があります。今回は、このお地蔵さんの話を今泉・鍛冶町三の杉山繁次郎さん(七十九歳)に教えていただきました。

村人に好かれたおじいさん

昔は今泉七丁目の愛鷹神社より北側は一面の畑でした。桜地蔵さんのある場所は墓地になっていて、そこに、墓守のおじいさんが住んでいました。おじいさんは人がよく、酒が好きで、たくさんの村人から好かれていました。おじいさんは、墓の草を取ったり、掃除をしたりよく働きました。年には勝てず、あるとき寝込んでしまいました。おじいさんは自分の最期を悟ったのか亡くなる直前に「わしが死んだら、せめて酒を供えてくれ、きつと子供たちが丈夫に育つよう守るから」と言い残しました。

桜の根元に祭る

村人たちはおじいさんの気持ちをくんで、お地蔵さんをつくりました。そして、墓地の隅にあった樹齢何百年かの桜の大木の根元に祭り、お酒を供えるのを忘れませ



桜地蔵さんのお堂

その後、村の子供たちが元気に育つので、村人たちはおじいさんの徳をありがたく思い、だれ言うともなく桜地蔵さんと呼ぶようになりしました。

よだれかけに願かけ

杉山さんは昭和の初めから現在の様子を「よだれかけに名前を書いて、お地蔵さんにかけて、夜泣きや虫封じに効くと言われ、昭和の初めごろは何十枚もよだれかけをしていました。今でもよだれかけを上げる人はあります。清水や蒲原など遠くからも来ますよ。祭りは八月二十四日に行っています。桜の老木が枯れてしまったのが残念です」と話してくれました。

地名の由来

がき 垣 へい 平



平垣村は弘治年間(五五〇〜五六一)に石川三九郎の開発だといわれます。それは古郡氏の加島新田の開発より百余年も前と伝えられています。

そのころ、外木治兵衛が外木村を、古郡三郎左衛門が籠下村の開発に着手したと伝えられています。平垣の名称の由緒は、残念ながら明らかではありません。幕末期の平垣村は旗本目向小伝太の知行地でした。